

光照寺旅行

二〇一四年十一月十四日

於 巖松会館（福岡県）

「九州の同朋を訪ねて」ご法話

「九州の同朋を訪ねて」 佐々木玄吾先生 ご法話

「よき人の常の仰せ」 堤 日出雄先生 ご法話

光照寺旅行

二〇一四年十一月十四日

於 巖松会館（福岡県）

「九州の同朋を訪ねて」ご法話

「九州の同朋を訪ねて」 佐々木玄吾先生 ご法話

「よき人の常の仰せ」 堤 日出雄先生 ご法話

光照寺住職 挨拶

皆さんとともに、光照寺の旅行ということで、「九州の同朋を訪ねて」という題で巖松会館に参らせてもらいました。私としては本当に有り得べきこととして喜んでいることとございます。先程、バスの中で細川先生、巖松会館について、私、玄吾先生、田中先生の三人で皆様にお話をして参ったこととございます。それ以上のことを申し上げることはここにはないわけです。私からすれば細川先生が願って宗像の地、赤間に巖松会館を建立された願心が本当に今日ここまでお育ていただき、光照寺御門徒、役員さんにご縁をいただきお参りできたことは本当にあり得べきことです。お育ていただき誠にありがとうございます。あいすみませんという思いで挨拶はこれに尽きると思います。一つ細川先生からいただいた言葉を皆さんにご紹介をします。

私達は巖松会館に参らせていただき、一泊させていただき、玄吾先生には光照寺聞法会の延長として、移動聞法会をやっていたたくとして、病気を押して参じていただきま

した。この巖松会館の責任者と言いましようか、主と言いましようか、理事長と言いま
しょうか 堤先生を何とお呼びしたらよいのかと思いますが、その代表役員であられる
堤先生のご法話も頂けますこと誠にありがたいことと思っております。細川先生にたくさ
んの言葉をいただいたわけですが、亡くなられるときに年賀状に書かれた言葉、それが
全てを象徴するのではないかと思っております。一月元旦に亡くなられて、年賀状
は届かなかったわけですが、その出そうとされた年賀状のコピーをいただいて本当に感
極まっておるわけであります。光照寺の本堂、小さな本堂ですがガラス戸の中に先生の
遺影とその年賀状の書かれて出されなかったそのお言葉を額に入れておることござい
ます。その言葉を皆様に、ご存知の方もおられると思いますが、細川先生を語るにはこ
の言葉一つに集約されるのではないかいつも思っております。その言葉は「人生を浄
土の縁として 如来のまごころの中を生きさせて頂いて 慶びこれに過ぎるものありま
せん 南無阿弥陀佛」そういうお言葉でありました。細川先生の願心はこの言葉に本当
に全てがあらわれておったのではないかとこう思っております。これが即ち人を育み、

多くの人を生み出して、今日、尚、ここに生き生きとして人の中に生きている、伝わっていると感じると、本当にこの言葉一つの中に願われていた一生涯が終わられたなあと思います。先程お墓にも皆で参らせていただきまして巖松会館に泊めていただき、佐々木先生と堤先生のご法話をいただけたとはこんなありがたいことはありません。本当にありがとうございます。

「九州の同朋を訪ねて」 於「巖松会館」

二〇一四年十一月十四日

佐々木玄吾先生 ご法話

今晚は。佐々木玄吾と申します。光照寺の護持会会長というもったいない名前を賜りまして、その任は果たしていけないけれど、また今日もお話をするわけでございます。本当にお粗末なことでお話に値しませんけれども三十分間ほど時間を賜りましてお話しさせていただきたいと思います。

九州の同朋を訪ねて

友をたまわる

友は師によって与えられる

題は「九州の同朋を訪ねて」と言うふうにパンフレットの中にありましたが、これは私がそういうふうに題を付けたのではないんですね。その題は多分、幹事の人が付けたのだと思いますが、同朋というのは何かと言いますと友、つまり友達ということですね。友ということは非常に大事なことでして、私たちが聞法していくとですね、ご褒美が与えられると言いますよね。何が聞法のご褒美かと言うとそれは「友をたまわる」とです。細川先生が亡くなられて丁度丸十九年になります。十九年はずいぶん長いですが、もう少しで二十年ですから。ずいぶん私たちは親しくしてもらいましたが、亡くなられてから二十年も経っても、この巖松会館に参ろうと足を運びます。堤先生をはじめ皆様にお世話になり、今晚はここに泊めていただき、また食事を作っていただき、ここにおもてなしをいただくということは、本当に先生からいただいた友の働きなのです。本当に友は師によって与えられる。友を探そうと思っても友がないと言っているのは、先生がないということなのです。だから「友は師によって与えられる」。本当にいつま

でたつても二十年もの歳月を経ても、先生が亡くなられてからですよ。二十年の歳月がたつて、ずいぶん昔の事なのですが、それなのに『友よ』と言って迎えて下さり、私たちも「九州の同朋を訪ねて」というような題を付けた旅行が出来るということは非常に有り難いことだと思います。先生は非常に喜ばれましたね。ここの土曜会に参ることをね。

後から私は葉書を貰ったことがあります。どのように書いてあるかと言いますと「ご夫婦で聞法に出かけてくれてありがとうございます」という葉書を先生の方からいただいた。その時に「ご夫婦で」と書いてあったので、私はいつも先生に叱られていましたから私のことをご夫婦なんて言われるのはちょっと分からなかったのですが、それでもそういうふうに尊敬するというか、高く買ってくださいってここへお参りすることを非常に喜ばれました。そういう友があることは本当に幸せなことですね。現在孤立しているとか孤独死とかいろいろな問題がある時に、そういうことが私どもに恵まれていることは本当に私は有り難いことだと思います。

そこでまず 友の役割り。

一・友の役割り

勸　　すすめる

証　　証明する

護　　まもって下さる

讃　　評価する

友はどういう役割を持っているのか。「勸・証・護・讃」と言います。

勸というのは勧める。友というのは人に勧める。私はこの度体調を悪くしまして自分に自信がないんですね。行かないと言ったんですね。この会に参加しない。申し込みはしてあったのですが。それで妻だけが会費を納めたのです。ところが良く聞いてみたら

二五名というところで一名足りない、と。困るのだろうなあと思って、私が行けば二五名になるわけですから、それなら行った方がいいなあと思ったけれども、なんか自信がないんです。なぜ自信がないかと言うと病氣をしたからです。病氣して入院したりすると氣が弱くなるんですね。本当に「死なんずるやらんところばそくおぼゆることも、煩惱ぼんのうの所為しよゐなり。」（『歎異抄』第九章 六二九頁）と『歎異抄』にあります、これは本当にここでお終いになるのではないかと思うものです。そう思わない人もいるそうですが、私はそう思うほうなんです。非常に心細く思い今回は止めておこうと思ったのです。

ところが十一月四日に予約が入っていて検査にこいと言うのがあるのですね。どんな病氣かと言うと二つあるのです。不整脈ですね。なんか心臓がどきどきする。もう一つ、一二日間入院したのは何かと言うと、前立腺炎という病氣で物凄く熱が出たのです。そうして白血球がすごく増えていて入院しました。おしっこが出なくなる病氣です。これも生まれて初めてなのですから、尿道に管を付けて尿を採らなくてはいけないのは

本当に大変なのです。丁度その前に私の家の猫が具合が悪くなって同じようにして、こ
うやっていたのを見てあれをしてくださいと言ったんですよ。（笑い）病院の先生に。
それはそうだろうと言ってやってもらった。それからおしつこの袋を抱えて歩いていた。
一二日間入院していたら治ったのですよ。治ったと言ったらおかしいんですが、そう治
りはしないのですが。大分軽くなった。その先生に聞いてみよう。自然治癒力が人間
にあつて治るといふのを信奉していたのですけれど、しかし、すごいなあ医者とは、今
はお医者さんを信奉するようになりました。（笑い）

そうしてその先生の見方が信頼がおける。この人がだめだと言ったら止めよう。いい
と言ったら行こうと、十一月四日に病院に行つたんです。聞いたのですよ。「長崎の方
まで行くのですがどうでしょうか」と聞いた。先生は「いいですよ」と。（笑い）夜は
ビールを飲んでもいいでしょうかと聞いたら「大丈夫です」と。それでは何にも悪いと
ころはないのではないか。そう言われたので、自信がないなりにやってきました。しか
し、その時に私の妻が勧めたのです。なんて勧めたかと言うと、「せつかく一名足りな

いというのだから、行ったらいいじゃないのか。副住職もそういつて言われるし。電話をかけてみな、とても喜ばれるよ」と言われました。（笑い）それから病院から帰りましてすぐ電話をして参加をしますからと十一月四日に言いました。ですから、今日ここで皆様の前でお話できることが非常に嬉しく思います。そこで今は余談な話でしたが、勧めるでしょ。一人足りないから行ったらどう。勧めて下さる。そういうのは友の役割。その次は証明する。本当にその道を歩いて行ったら。つまり聞法・勤行・念仏と言つて聞法をし、勤行し、念仏し、そういう道を歩いていったら間違はなくこの人生を全うすることが出来る。良かったと言つて出来る。身を以つて証明して下さる方が友だと。自分の身を以つてそれを行ったら心配ないのだよ、必ず良かったと言つて死ぬことが出来る。あるいは良かったと言つて暮らすことが出来るのだと。そういうことを証明して下さる。それが友の役割だと。

その次に護つて下さる。護つて下さるとは困ったとき、どうしようもない時に助けて

もらえる。そういうのが友なのです。どうしようもない時に助けてもらう、私は細川先生にどれだけ助けてもらったか分かりません。私が一番本当に困った時はどういう時かというと、五四歳の時に学校に勤めていましたからね。もう行き詰って学級崩壊で子供たちが騒いで授業が出来なくなつたのですね。その時私は非常に苦しんで細川先生に相談をした。それは君、病院に行つて診断書をとつて休ませてもらった方がいいのではないか、と。そういつたものは病院の先生がすぐに書いて下さるものではないかと。君を見ていたらすぐに書いてもらえるでしょう。（笑い）それほど行き詰っているわけです。それで書いてもらつて持つて行つた。そうしたら校長先生がもの凄く止めなされた。学校の方はなんとでもする。年休も一杯あるから休んで、そうすれば自分が何とでもするから休むなど言われたのですが、その時には私は細川先生が頼りですから、私は休みます。強く出ると、校長も休むと言うものを休ませないわけにはいかない。しかも診断書を持つて行っているから。それで休んだ。その時に細川先生が何と言われたかと言つたら、「俺なら休むがなあ。それはもつと自分を大切にするからなあ。」休むことが自分

を大切にすることかなあと思いましたけれども、しかし、その時休んだお蔭で今八四歳と七か月、この前病院で書いてありましたから、八四歳七か月までここで話をさせていただくことが出来たのは、あの時に半年ほど休んだお蔭だったなあと思って本当に私は嬉しかったです。それから私は教壇に復帰して頑張ることが出来ました。そういうことが具体的に護って下さるということだと。

そうして讃嘆。讃嘆とは褒めるということです。これは評価する。評価するとはその人を正しく評価する。悪ければ悪い、よければよいと正しく判断することを讃嘆するといひます。褒めてばかりいてはだめなのです。君は間違っているのだと言えることが讃嘆ということなのです。そういうことを教えてもらいました。誰も評価しているのですが同朋というのはそういう役割を持っているのだということを思いました。そういう九州の同朋を訪ねてと。

その次に自己とは何かということを私は考えているんですね。

二. 自己とは何か

今日も悪く（現在）

昨日も悪く（過去）

明日もまた いよいよ悪いのである（未来）

「如来がわかれば自己がわかる。自己が分かれば如来がわかる。わからぬものは自己である。」という言葉があります。

これは夜晃先生、あそこの写真の一番右側の人と言われた言葉です。自己とは何か。汝自身を知れ。こういうことを言いますが、如来がわからないと自己がわからない。「如来がわかれば自己がわかる。自己が分かれば如来がわかる。わからぬものは自己で

ある。」自分とは何かといくら考えてみても、それは如来がわからないとわからない。そういう言葉があるのですね。それでは夜晃先生が自分のことを何と言われたか。それはこういうふうに言われました。「今日も悪く、昨日も悪く、明日もまた、いよいよ悪いのである。」自己とは何かそういうことである。今日も悪くとは現在です。今も悪く、現在です。昨日も悪くとは過去です。そうして、明日もまた悪いのである。それは未来ですね。私たちは教えを聞くと明日は良くなるだろうと思うのですね。なぜかと言うと南無阿弥陀仏に出会うのだから。今日は悪くというのは確かに何か悪いことをしたかなあ。昨日も悪く、昨日もあんまり良いこととしていなかったなあ。昨日も悪く。昨日も本当にあんまり良いこととしていなかったなあと言うことは分かるけれども、明日もまた悪いのであるというのは非常に分かりませんね。だってお念仏の話を聞いたら明日はよくなる、仏になるという話ではないかということになります。私も本当にこれは何といつか、本当の言葉ですね。「明日もまた、いよいよ悪いのである」という言葉は聞いて知ってはいるのですけれども、この辺は置いておいて、「今日も悪く、昨日も悪く」、は

何かわかるようなわかったような。「明日もまた、いよいよ悪いのである」と言うのは非常にわからないのですね。今もわからない。「明日もまた、悪いのである」「明日もまた、いよいよ悪いのである」これは中々難しいでしょう。なぜかと言うと私たちは何といいましょうか、「本願を信じ、念仏申さば仏になる」という言葉がありますよね。

「他力真実のむねをあかせるもろもろの聖教は、本願を信じ、念仏をもうさば仏になる。」（『歎異抄』第十二章 六三二頁）

仏になるのであれば明日は良いのではないかと。仏になるのだから。それなのに、明日もまたいよいよ悪いのである。これは夜晃先生の言葉です。いよいよ悪いのです。これが中々わからない。又、夜晃先生がこうおっしゃいました。

「今日教えを聞いて明日よくなろうとする心、この心に騙されることいく千度。」

今日教えを聞いて、今日教えを聞くんだからきつといい話を聞くのだろう。そうすると明日は良くなるうと。今日今までは悪かったけれども悔い改めて明日はよくなるうと、この心に騙されることいく千度と。私たちはどうしてもよいものになるうとする。何とかしてよしとなるうとする。なんと言いますか、その、教えを聞いてよい人になるうとするんですね。明日もいよいよ悪いのであるというのは絶望でしかない。それではどうしたらいいのかと言うと、如来がわかれば自己がわかる。自己がわかれば必ずそれを包んでいる如来がいらつしやるからこういう自覚が持てるわけです。それでは如来がどういうふうにわかるのか。それは、「みだ弥陀のごこうしゆい五劫思惟の願をがんよくよく案ずれば、ひとえに親鸞しんらんいちにん一人がためなりけり。」「みだ歎異抄」の「後序」の問題です。「みだ弥陀のごこうしゆい五劫思惟の願をがんよくよく案ずれば、ひとえに親鸞しんらんいちにん一人がためなりけり。されば、そくばくの業ごうをもちける身にてありけるを、たすけんとおぼしめしたちける本願のかたじけなさよ」という言葉があります。

「弥陀みだの五劫ごこう思惟しゆいの願がんをよくよく案ずれば、ひとえに親鸞しんらんいちにん一人がためなりけり。されば、そくばくの業ごうをもちける身にてありけるを、たすけんとおぼしめたちける本願のかたじけなさよ」（『歎異抄』「後序」六四〇頁）

つまり、そくばくの業という。底莫とはこういう字を書きます。底がない。

底莫の業をもちける身とは「今日も悪く、昨日も悪く、明日もまた、いよいよ悪いのである。」と言うのが底莫の業を持っているということですね。その「底莫の業をもちける身にてありけるを、たすけんとおぼしめたちける本願のかたじけなさよ」という言葉があります。つまり底のない業をもちける身、底莫の業をもちける身を助ける。それは助からない私です。助からない私と言うことが本当に分らないと「たすけんとおぼしめたちける本願のかたじけなさよ」がわからない。「たすけんとおぼしめたちける本願のかたじけなさよ」がわかるということは、私は一生造悪というか私は助からない私ということがはつきりわかる。助からない私のはつきりわかるということが、た

すけんとおぼしめしたちける本願がわかることなのです。細川先生はいつもそうおっしゃっている。

これが本当の私 南無阿弥陀仏

最後に南無阿弥陀仏を付ける。南無阿弥陀仏と言うことが如来と私が一体になっていることです。

これが本当の私、底莫の業をもちける身にてありける、それが本当の私、南無阿弥陀仏。

そこに「今日も悪く、昨日も悪く、明日もまた、いよいよ悪いのである。」と言うことに安住していくことが出来る。そうなるかどうかと言うと、ここでオーバーに言うといけませんね。そうなるかどうか。生きて良し死んで良し、と言いたいのですが、それだけの自信がないから言わないで、やっぱり焦らないというか、そういう私自

身が焦らないで生きられる。ああそう。お前は焦らないのかと言われるかもしれないが止めておいて、丁度時間が来ましたから終わるのですが、実はもう一つ今日は本当に話したかったことがあります。時間がないのではなくのですが、題目だけ書いておきます。

三、病老死を前にして

今回、私、老病死を前にして、老というのは私が年寄りでしょ。病、病氣、入院したのです。死ぬかなあと思ったのです。老病死を前にして、実はこの話を一番したかったのですが、置いておいて終わりたいと思います。これに対するヒントは何かと言うところの前、志慶眞先生が「心の時代」に出ておられてそこで語られましたね。関先生と細川先生の往復書簡の話があつて細川先生が人間死ぬ時に二つのことがあるのだと。一つは私が死んだらどうなるのだろう。もう一つは残ったものはどうなるのだろうか。二つの

問題が人間にはある。その問題を解決することが大事なのだと。それは南無阿弥陀仏に託していくことが自分自身が満足であり、また、残った者もそれによって刺激を受けて生きていけるのだと。念仏をいただくことがそれを解決していく問題なのだ、ということと話しておられました。私はその手紙をですね、もう一回読み直してみても、なるほど本当に老病死を前にして、いよいよ念仏ひとつだなあと思いました。ありがとうございます。

佐々木玄吾先生　ご法話　板書

九州の同朋を訪ねて

友をたまわる

友は師によつて与えられる

一. 友の役割り

勸　　すすめる

証　　証明する

護　　まもつて下さる

讃　　評価する

二. 自己とは何か

今日も悪く　　（現在）

昨日も悪く　　（過去）

明日もまたいいいよ悪いのである（未来）

「そく（底莫）ばくの業をもちける身にてありけるを、たすけんとおぼしめしたちける本願のかたじけなさよ」（『歎異抄 第一八章 六四〇頁）

これが本当の私 南無阿弥陀仏

三．病老死を前にして

「九州の同朋を訪ねて」 於「巖松会館」

二〇一四年十一月十四日

堤 日出雄先生 ご法話

皆さんこんばんわ。遠路はるばる、『歎異抄』で言えば十余か国ならぬ二十か国くらいでしょうか、飛行機ですから二、三時間ですが、本当によろこそおいでくださいました。ありがとうございます。一晩一夜の御縁でありますけれど、私ども深く生涯忘れることのない出会いではないかと非常に嬉しくありがたく思っております。せっかくお時間をいただきましたので、十分なことを申し上げる力はございませんがこういうことを申し上げたいと思います。

「よきひとの常の仰せ」

「よきひとの常の仰せ」よき人とはご承知のように『歎異抄』第二章ですね。

「親鸞しんらんにおきては、ただ念仏して、弥陀みだにたすけられまいらすべしと、よきひとのおおせをかぶりて、信ずるほかに別の子細しさいなきなり。」（『歎異抄』第二章 六二七頁）

親鸞聖人が法然上人のことを「よきひと」とわかりやすく仮名で表わしてある。その深い心に触れませんが、私どももそれにならってかけがえのない善き師、善知識であられた細川巖という先生を善き人と申し上げたいわけでございます。「常の仰せ」というこの言葉は、これまた『歎異抄』の「後序」と言って『歎異抄』の終わる前の所に常に親鸞聖人はこういうことをおっしゃったのだと、大体三つ位、唯円が書いており

ますね。それにならって「常の仰せ」と申しました。

「聖人のつねのおおせには、「みだ弥陀のごこうしゆい五劫思惟の願をよくよく案ずれば、ひとえにしんらん親鸞一人がためなりけり。いちにんされば、そくばくのごう業をもちける身にてありけるを、たすけんとおぼしめしたちける本願のかたじけなさよ」と御述懐ごじゆつかいそうらしいしことを」

（『歎異抄』「後序」六四〇頁）

まあ、いきなりそれに入る前に、せっかくの御縁ですので亡くなられた細川という先生について、少しご紹介を申し上げようかと思っています。

まずお写真はお分かりでしょうね。左側のお写真が細川巖先生でございます。先ほどお話がありました右側の写真は細川先生の善き師、善知識、この方は広島に出られた住岡夜晃先生です。この方は「真宗人名事典」にも載っておりますけれど、あまり中央では知られておりませんが非常に優れた先生でした。亡くなられて六五年経ちます。

細川先生は大正八年一九一九年の三月福岡市にお生れになりました。福岡出身です。学校は広島高等師範から広島文理大学に進まりました。その広島文理大学の学生の時に二四歳だったようですけれども今の住岡夜晃先生にお会いになったのです。そして六年間夜晃先生に師事されましたが、細川先生は三十歳で郷里福岡にお帰りになって、当時久留米にあった、後の福岡教育大学に奉職されました。奉職なさって一年後の三十一歳から、先生はもう若い学生を相手に仏法の話をしていかれる。夜晃先生は、細川先生が福岡に帰られた年の十月に亡くなりましたから、その夜晃先生の御恩徳に応えたいという思いが強かったためだったと思います。

そういう三十一歳の時から、亡くなられたのは七十六歳ですから、その間実に四十五年間、先生は仏法の話をされ続けられたのです。それはまさに釈尊も、お悟りを開かれた三十五歳から亡くなられる八十歳まで、四十五年説法をされたわけですから、その点同じなのですね。それくらい先生は仏法を説くことに生涯をかけられました。

それでついでもう少し申し上げます。先生は五十歳の時に巖松寮という寮を作られ

て、福岡教育大学の学生を中心に若い学生たちには是非この仏法、親鸞聖人の教えを伝えたいと熱心に働きかけられた。比較的小さな寮で、寮生の数は十何名ですが、二十年近く続いたので、寮に入られた方は百何十名になったのではないかと思います。その中から、本当に仏法を説いてくださる方が二人三人と出ておられるのです。そして五十歳の時にこの「巖松会館」（がんしょうかいかん）という、仏法を学ぶための道場を作られました。「巖松」（がんしょう）の字の由来は、「巖」は先生の名前（細川巖）で、「松」は先生の奥さんの名前（まつき）から取られたという説もありますが、これは俗説で、たまたまそうなったのです。ゴロ合わせみたいなのですね。

本当は、夜晃先生のお作りになった「巖上の松」（がんじょうのまつ）という詩から取られたものです。島根県の浜田の近くに折居（おりい）という海岸があり、その海の中に小さな島ともいえない岩の塊のようなものがありました。その中にどこから飛んできたか松の実が飛んできて、土もないような岩の中に根を下ろし、やがて一本の見事な松になった。それを見て感動された夜晃先生が詩を作られた、その詩の題が「巖上の

「松」ということで、その「巖」と「松」でございますね。

先生の作られた「巖松寮」も「巖松会館」も、すべて先生が私財をなげうって作られたものです。銀行から次々借金されて作られたのですから、ボーナスなんかとても自分の方に入らない。奥さんは大変だったと思います。本当にご苦労されたのです。

そうして五十六歳で大学を早めに退職されました。先生は仏教

の目指すものは真の人間形成、本当の人間をつくることであるという考えを持っておられて、仏教によって教育するためには、二十歳過ぎの大学生ではもう遅い、むしろ幼児の時から大いなるものの前に手を合わせるといふ、そういう習慣をつける、幼い子供たちこそ、仏法、仏様の心を伝えなくてはいけないと考えられました。そこで保育園を作られたのです。名前を「ひかり幼稚園」とされました。それが今この隣にある建物で



す。このようにして、先生は若者や年配の人にも仏法を説いて教化されましたけれども、一方では幼児教育にも打ち込んでいかれたのです。

先生の仏法による教化の特色は、毎月一回の法座を十年、二十年と続けられるということ。そのような会を十何か所持っておられて、毎月まわっておられました。地元福岡は勿論、広島や福山、京都、東京などにも足を運んでおられたのです。

しかし先生は月に一回の聞法では足りないと考えておられて、福岡の博多駅の駅前の朝日カルチャーセンターでは、毎週一回話をされました。したがって月四回です。一回が二時間ですが、月に四回ですから徹底します。したがってこの講座の中から沢山の聞法者が育っていかれました。カルチャーセンターには沢山の講座がありますが、こういう講座はまずありません。せいぜい月に二回です。

そうすると、昼間はカルチャーでお話されて夜は別の所へ行かれるという風に、一日二回、別の会座でお話されることもありました。数えてみると、ご晩年の七十過ぎても、毎月の会座が十九あるのです。一ヶ月のうちに十九の会座です。まあ、そういうご無理

もあつて七十六歳の時胆管癌になられ、手術はされましたが、結局一九九六年に亡くられました。

このように先生の大きな特色は、私財をはじめ自分の人生を投げ出して、仏法のために働かれたことです。先生ほど沢山仏法のお話をされた方はないのではないかと思います。けれども、同時にこの先生は社会的な活動も決しておろそかにされませんでした。一つは福岡教育大学です。これはもとはいくつか分かれていた師範学校が一緒になったものですから、いわゆるタコの足大学だったのです。それを一つに統合するという、その統合運動の中心になられたのです。その統合に必要な土地を買うのに、宗像の例の海賊と呼ばれた出光佐三さんに会われて話をされた。そして何億かのお金を寄付してもらわれたそうです。

また、注目されるべきは、福岡県の「公害対策審議会」の会長という公的な仕事を、一九七三年から実に十八年されました。さらに後に財団法人の「九州環境管理協会」という組織を仲間と一緒に立ち上げられ、その理事長をされました。このように先生は非

常に視野が広く、社会的活動においても大きなお仕事をなさったかたです。来年二〇一五年で丁度十九年、亡くなられて十九年たちます。

前置きの話がすっかり長くなってしまいましたが、これから本論の先生の「常の仰せ」について申し上げます。いくつか申し上げますが、これは先生が一字一句この通りにいわれたわけではありません。私が少しまとめて、先生が言わんとされたことは大体こういうことだったと、私が受け止めた言葉と了解して下さい。

(一)「この教えは私にとって具体的に何か？」

つまり仏法の教えですね。教えはいろいろ「経・論・釈」ありますけれど、仏法の教えその言葉、それを聞いて我々は良くわからないままに鵜呑みする。丸のみして分かったように思うということがあります。しかし先生はそういうことが嫌いで、今聞いたこの教え、この言葉は私にとって具体的にはどうということなのかをしっかりと自分の頭で考

えなければいけない。このことをいつもおっしゃっておられました。

つまりそれはどういうことか、自分の現実、自分の足もとの現実を通して考える。現実を見失わないということです。仏法はどこまでも私の問題を、人間の問題を明らかにしているわけですから、教えを聞いても自分の現実とつながらないような聞き方をしていたのでは身につかないですね。だからそういう意味でまず自分の頭でしっかり考えよと言われたのです。

たとえば「あるがままを受け取って念仏申せ」という夜晃先生の言葉がありますが、これはどういうことか、しっかり考えないとよくわかりません。

そしていわゆる権威主義といいますけれども、偉い先生がこう言われた、非常に優れた先生がこう言っておられると、それをともしれば我々は間違いないと鵜呑みして、自分の頭で考えない、よくわからないままにその言葉を振り回すと、こういうことがありますね。私なんかもそういうところがあります。これが権威主義ですね。先生はこのような権威主義を否定されました。先生は化学を専攻された科学者ですから、事実をしつ

かり押さええないで、誰かの説とか言葉を観念的に丸呑みすることを非常に嫌われたのです。そういうことが非常に印象に残っております。

二つ目は、これはわたくしなりに少し変えて簡略にしているところがありますけれど、次の言葉です。

(二)「ニワトリの卵の願いは殻を破ってヒヨコになることである」

ニワトリです。ニワトリの卵の願いは何か、それは殻を破ってヒヨコになることではないのか、まったくこの通りではなかったのですが、大体このような言葉をいつも、いつもおっしゃっておられました。ニワトリ、先生はニワトリを沢山飼っておられましたので、よく観察しておられました。ニワトリの卵、ニワトリの卵の願いが仏法につながっていると思われたのです。

卵の願いは何か、たとえば卵をどこに置くか、高いところに置くとか、あるいは立派な容れものに容れるとか、あるいは卵に色を付けてカラフルにするとか、出来るだけ長持ちさせるとか、そういうことが卵の願いだろうか。それは卵の願いではないのではないか。卵をそのままにしておいていくら置き場所や容れものを考えたり、飾ってみてもそれは卵の願いではない。

卵の願いはやはり時が来て親鳥が、今は孵卵器でしょうが、それを温めてついに殻が破れてヒヨコになることである。卵の殻は卵を守るためにあるわけですが、親鳥が温めると、段々ヒヨコの目ができ、頭ができ、足ができてきます。そうすると外側から親鳥がつつく。内側からもヒヨコがつつくようになるのだそうですね。それを卒啄同時と聞いたことがあります。そして時が来て、遂に殻が破られて広い世界にヒヨコとなって出る。そしてさらにヒヨコが親鳥になる。

この卵の殻が、我々人間の自我の我執の煩惱です。我執の殻です。皆、一人一人自我の我執の殻に入っているわけです。仏の智慧に照らされてみるとそれを抱えたままで一

生を終るかもしれません。どんなに出世してみても色々世間で成功してみてもこの自我の殻の中に入ったままであつては、ついに本当の人にも成れません。本当の人間の願いを満たすことは出来ない。人間は自我の厚い殻を破られて、広い大きな世界を生きることが出来ないと本当の人になれないのです。

この卵の喩え、卵からヒヨコになることを、『歎異抄』の会などの毎月の会座で繰り返し仰いました。毎回同じことを言われるのです。私などは「またか」と、「また先生は同じことを言われるのか」と、申し訳ないがそういう思いをしたことがあります。しかしこの喩えには先生自身の深い感動がおりだったのですね。ニワトリを飼っている生活の中で、こういう喩えを思いつかれたのでしょうか。これが仏法だと納得されたに違いありません。この卵の喩えは、全く誰も言っていないとは思いますが、あまり聞きません。

私たちは自我の殻の中にいる。人間は自我の殻によって自分を守っているけれども、その自我の殻が私を狭い小さな世界に閉じ込めている。如来の本願は、汝、自我の殻

を破って大きな世界に出でよ”と呼びかけていると、先生は特に若い人にこのことを何度も教えてくださったように思います。

(三)「現実を金床として聞法せよ」

三つ目はこれも少し私なりに要約しているところもありますがこの言葉ですね。「かなとこ」と読んで、独特の先生の喩えなのですが、金でできた台で、これは鍛冶屋さんを使うものです。堅い金をたたいて直す台ですね。どういうことを言っているかと言いますと、これだけでは分かりませんが、たとえば曲がった釘があるとします。曲がった釘を真っ直ぐにしたい。どうしたらいいか。金槌で曲がった釘を叩いて直す。そうですね。ところが叩いて直すのですが、曲がった釘をどこに置くか、これが問題です。たとえば砂の上のような柔らかいところに釘を置いていくら金槌やハンマーで叩いても、釘は砂の中にのめり込むでしょう。土台が柔らかいものだからちっとも直らない。そうではなく

て、堅い金でできた台の上に曲がった釘を置いて、ハンマーか金槌で叩いたら直るでしょう。そのことをおっしゃるわけです。

つまり、今我々はこうして仏法を聞いているけれども、浄土真宗の教えは聞法するところが一番基本になるのですけれども、もう一つ大事なことは私の現実です。私が今直面している、私が今抱えている現実、これが私に仏法が届いてくるためになくってはならないものです。私が仏法を了解するために非常に大事なものの、それが私を苦しめ悩ますような、私の思い通りにならない現実です。

もしうなずいて聞いている仏法と、足もとの自分の現実とが二つに分かれているならば、それではいくら聞いても空回りです。足もとの自分の現実とは、私の思い通りになることもあるけれども、私の思いに反する現実もあります。どうしてこうなったのか、どうして私がこんな目にあわなくてはならないのかと、愚痴が噴き出すようなとても受け取れない、とても納得できない、厳しい現実があります。自然災害の問題があったり、人間関係の問題があったり、仕事の問題など、色々な問題があり、それらはすべて縁に

よって起こるものですから、どんなに気を付けても起こる時には起こるのですね。

その現実が私の愚かさ、弱さ、とらわれの深さなど、つまり私の限界を教えてください。その現実が私の愚かさ、弱さ、とらわれの深さなど、つまり私の限界を教えてください。それは自分の手に余るというか、自分の力ではとても解決できないものです。から、仏法、本願の法はそういう厳しい現実を通して響いてくるのです。本願はこのような、現実を受け取る力のない私のために起こされていたのかと、このような現実を通して、本願の法と私がつくなるのです。言い換えれば、このような厳しい現実が、本願にまかせるほかない自分を教えてくれるということです。私たちは、「自分はまぢがない、やれば出来る」と、わが身をたのむ自力の心のかたまりですから、いくら他力の教えを聞いても中々本願（他力）にまかせることが出来ないのです。

現実を金床にするとは、現実私の思いによつてはビクともしないものですから、そのような現実を縁として仏法を聞いていくことですね。そうすると、その堅い厳しい現実が私の頑なな思いを破ってくれます。たとえば癌であると言われた時、私は癌じゃない、癌になるはずがないといくら頑張ってみても、癌であるという事実

診断が間違っていないければどんどん症状に現れてくるだろうし、これは私がいくら癌ではないと言ってみてもどうしようもない。現実私の思いではびくともしない。そうです
すね。

私の思いは私の力によって破ることは出来ません。私の思いを超えた仏法によらなければ破れません。厳しい現実、その法のはたらきを助ける大きな縁になるのです。法と現実とが共同して、私の厚い自我の殻を破ってくれるのです。したがって先生は「現実を金床として聞法せよ」と言われたのですね。もし現実が柔らかい砂のようなものであったら、私たちはそれを自分にとって都合のよいように解釈して、チットモ自分の問題に目覚めることが出来ないでしょう。「現実を金床にする」とは、現実を私の闇を照らし破ってくれる仏法として受け取るということです。これは聞法がまだ不徹底な時はできません。こういう課題を持って聞法するということでしょう。

(四)「如来を相手にし 如来の前なる生活をしよう」

如来を相手にし、如来の前なる生活をしよう。これもいつも先生が仰っておられた「常の仰せ」でした。如来を相手にするとはどういうことか。こうして我々は日常生活を送っていますが、常日ごろ私が相手としているものは何だろうか。まず普通は人ですね。勿論仕事とか、ことがら、世間ということもありますが、大体相手となる人がある。相手は氣にいった人もあるし、氣に入らない人もあるし、あの人だけは顔も見たくないとか、どうしても許せんという人もあるかもしれません。まあ色々な人間の関係があり、それを愛憎善悪と言います。

人を相手にするとは、その人は私をどう思っているか、私に対する相手の感情や心の動きを常に氣にすることです。つまり相手のことを問題にしているようで、本当は相手の中の自分というか、結局自分のことを問題にしているのですね。相手から悪く思われないうちに、愚かな人間だと見られないように、常に氣をはって生きている。ありのままの自分でおれない。

つまり相手との人間関係の中で、相手に引きずり回されたり、相手を自分の思いで決めつけたり、要するに自分の思いの枠を出ることが出来ない。このように、私たち（私）はいかに自分にとらわれた我執の強い存在か、自我関心を一步も出ることが出来ないかと、私たちの人間関係の中身をみればそれが分かります。

それは言い換えれば、世間を相手にしているということです。世間と言っても具体的には人です。私がこういうことをしたら人はどう思うだろうかとか、世間の評価とか世間から少しでもよく思われたいとか悪口を言われたくないとか、世間を相手にする限り私は常に自分を飾りつくろって、ありのままの自分を生きることができないでしょう。そういう世間を超えることが、相手の人を超えることであり、さらに自分の煩惱の自我の思いを超えることです。我執の思いは、計らいやとらわれ、分別です。そういうものを超えようとすれば如来を相手にすることしかありません。

如来を相手にするとは、如来は人ではありません。人を超えた法です。仏陀の悟った真理です。法とか真理というとか何か抽象的で何のことかよく分かりませんが、人間の迷

妄を超えた根源の真理が、南無阿弥陀仏という最も具体的な言葉となった、それを如来というのです。その中身は限りないひかりと、限りないいのちといわれます。「ひかり」とは、私たち凡夫の迷いを照らし出す智慧のはたらきであり、「いのち」とは、私たちを無条件に生かしている慈悲のはたらきです。

したがって如来を相手にするとは、つねにそのような智慧によって煩惱のわが身を照らされることであり、どんなお粗末な私もそのまま受け止められている慈悲を感得することです。それは頭で考えるのではなく、具体的にナマンドブツと念仏することによって成り立つのです。如来を相手にするとは、念仏申すことです。

如来を相手にするとは、目の前の相手の人を無視することではありません。なぜかというと、実は相手の人も、本人が気がついていなくても、如来の中の人なのです。如来なる法（＝本願）によって痛まれ、悲しまれている人です。深く願われている人なのです。

如来を相手にして生きることが出来るようになることが仏法によって救われることで

す。如来が相手なのですから、相手が自分をどう思おうと、どんなことを言っている、大して気になりません。人からバカにされようが、悪口をいわれようが、そういうことによって私はもう動かされません。しかしそれは決して傲慢になることではなく、他人の言葉に謙虚に耳を傾けて、自分の間違いや足りないところを教えてもらおうとする心を持っています。

如来とは、親鸞聖人は『御本典』の「信巻」に『涅槃經』の文を引いて、如来とは真実であると述べておられます。聖人にとって、如来と真実は全く一つなのです。したがって、如来を相手に生きるとは、阿弥陀仏の真実まことをいただいて生きることです。

夜晃先生も「真実」という言葉を大変大切にされました。先生は「真実のみが末通る」といわれ、さらに「南無阿弥陀仏は人間に恵まれたたった一つの真実である」といつておられます。しかし私たちが如来・真実の法を聞いて、真実のいのちを生きるとは、私が真実まことの人間になることはありません。真実を自分の中に自認、肯定することとは全く間違っています。真実はどこまでも如来の上にあり、その如来・真実に照らさ

れた私の中には、真実といえるものはひとかけらも無いのです。聖人が仰るように、教えを聞いて「虚仮不実のわが身」に徹底するところに、如来・真実と私の出遇いが成り立つのです。私の正体はどこまでも「虚仮不実」ウソ、イツワリ、ヘツライ、虚偽そのものと目覚めることを「信心」というのです。善導はそれを「機の深信」と言いました。聞法によって如来の智慧に照らされて、真実まことの全くない私であると目覚めるところにのみ、如来・真実が丸ごと生きるのです。如来・真実に生かされきった私が誕生するのです。

如来を相手にするとは、如来とは私を照らし出す智慧のはたらきですから、常に私が問われるということです。他人を相手にするとどうなるかと言うと、何とかあの人を変えたい、変わってくれたら楽になるだろうかとか、人を変える方に一生懸命になるのですよ。自分が問題にならないのです。自分はノープロBLEM、問題ないというわけです。もっぱら問題は相手にあると。

相手を変えないといけないといつて相手が大体変わりますか。変わらないでしょう。

ですから、世間を大事にしている人は、常に世間とは常に自分の外側にいるあの人の人、あるいは周りの環境のことであって、そういうものを直したら、改めたら上手くいくということしかないのです。そういう考え方を外道といいます。もちろん相手にも色々問題があるでしょう。周囲の環境も、改めるべきことは沢山あります。

しかし仏教を学んで、仏法に本当に生かされるためには、私自身の抱えている問題に集中することを第一にするべきです。私たちが仏法によって救われるとは、私の内外に起きてくるその現実をそのままに受けとめられる自分になることですが、これほど難しいことはありません。ありのままの現実を受け取るとは、歯をくいしばって耐えることでもなく、黙って認めることでもありません。その現実を縁として如来（本願）と出会うことです。本願との出遇いなくして現実を受け取るとは出来ません。自分は間違いない、正しいと思い込んでいる限り、自分の思いに反した現実を受け取るとは出来ないでしょう。

最後にもう一つ、先生がよくおっしゃっておられたことは、私どもが仏法を本当に分

かろうと思えば、仏法の為に命を懸けねばならないという言葉でした。命を懸けるとはえらいオーバーな表現ですけど、昔の人は聞法は命懸けでするものだと言っておられたのですね。今の人はそういうことを言う人は一人もいないとよく言っておられました。

しかし具体的に仏法に命を懸けるとはどういうことか。もっと具体的に考えたらはつきりしている。これは私は面白いと思うのですが仏法の為にあるいは聞法する為にまずお金を使いなさいと言うことです。私はお金を命としているのではないかと言うわけです。そして仏法の為に、聞法の為に時間を使いなさい。お金と時間を惜しみなく仏法のために使う。これが仏法に命をかけることだと。実に具体的ですね。こういうことをいつもおっしゃっていたことを思い出します。時間が過ぎました。ありがとうございました。

堤日出雄先生　ご法話　板書

「よきひとの常の仰せ」

- (一) 「この教えは私にとって具体的に何か？」（どういうことを言っているのか）
- (二) 「ニワトリの卵の願いは殻を破ってヒヨコになることである」
- (三) 「現実を金床として聞法せよ」
- (四) 「如来を相手にし、如来の前なる生活をしよう」

あとがき

本書は光照寺旅行「九州の同朋を訪ねて」――巖松会館、明願寺、光教寺、長崎観光&クルーズ――と題して、平成二六年十一月十四、十六日の二泊三日の旅行（旅行幹事、川澄英明氏、淡海雅子氏、谷口正司氏）を企画した中で、初日の十一月十四日に巖松会館に到着して細川巖先生のお墓へお参りした後、会館にて佐々木玄吾先生と堤日出雄先生にご法話を頂いた記録です。

細川先生という方についていたる所でお聞きしておりましたが、改めて、先生のご遺徳を偲ばせて頂いたと同時に、仏法への情熱をもつて歩まれた先生であることを感じさせて頂きました。大変貴重なご法話を頂戴しました。

又、当日は巖松会館に一泊させて頂きまして、河野恭子様はじめ、ご婦人の皆様に心のもったおもてなしを頂き、宿泊に関して大変お世話になりました。感謝申し上げます。

佐々木玄吾先生、堤日出雄先生、住職には原稿に目を通して頂き校正賜りましたこと、この場を借りて厚く御礼申し上げます。

ご法話のテープを原稿に起こして下さいました、護持会役員の淡海雅子様、校正を手伝ってくれた役僧の池津徳彦氏に感謝申し上げます。

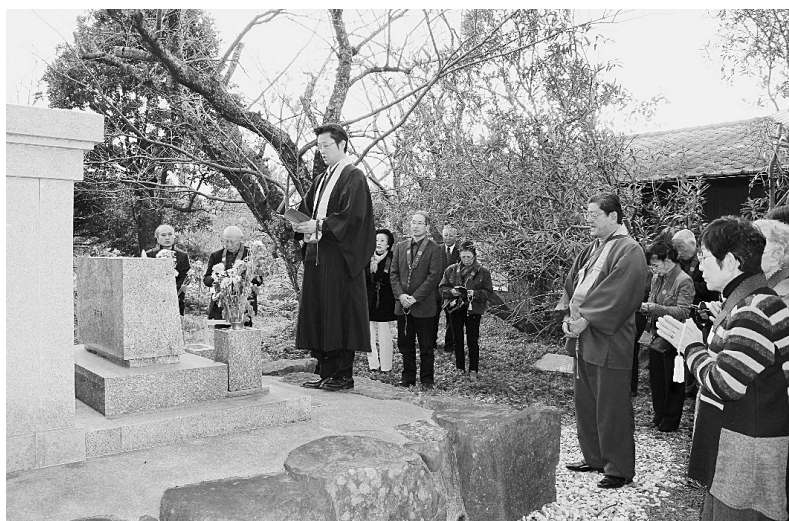
合掌

平成二七年十一月一日

光照寺 副住職 池田孝三郎



巖松会館の前にて



細川巖先生のお墓にて勤行

光照寺旅行

「九州の同朋を訪ねて」 ご法話

「九州の同朋を訪ねて」 佐々木玄吾先生 ご法話
「よき人の常の仰せ」 堤 日出雄先生 ご法話

2015年（平成27年）11月1日

発 行 真宗大谷派 弘興山 光照寺

事務局 〒331-0821

埼玉県さいたま市北区別所町102-2

電 話 048-651-2781